

水の哲学

宮沢賢治

「水や光や風ぜんたいが
わたくしなのだ」

宮沢賢治（1896-1933）は現在も多くのファンをもつ詩人・童話作家。岩手県花巻町で質・古着業を営む富裕な商家の長男として生まれた。盛岡高等農林学校を卒業後、農学校の教師、農業指導、工場技師などを務めるかたわら旺盛な創作活動をつづけたものの、37歳の若さで結核によって死去した。絶筆は手帳に書き残された「雨ニモマケズ」。代表作として詩集「春と修羅」、童話「銀河鉄道の夜」、「風の又三郎」、「セロ弾きのゴーシュ」などがある。

森羅万象と共振する

自然科学に精通していた宮沢賢治は野山を散策して創作へのイメージを高めていった。動物、植物、鉱物はもとより宇宙空間まで広がる森羅万象が作品の源泉となった。

それは自然を客観的な対象とする観察的立場とは根本的に異なっていた。そもそも宮沢賢治に自然対人間という二元論は存在しない。森羅万象に神々が宿るといふ汎神論的世界観もあって自然と人間は対立するものではなく共生するものとしてとらえられていた。

一神教による西欧的近代合理主義の場合、自然は人間による征服・改造・変革の対象としてあらわれる。旧約聖書の「ノアの洪水」に象徴される

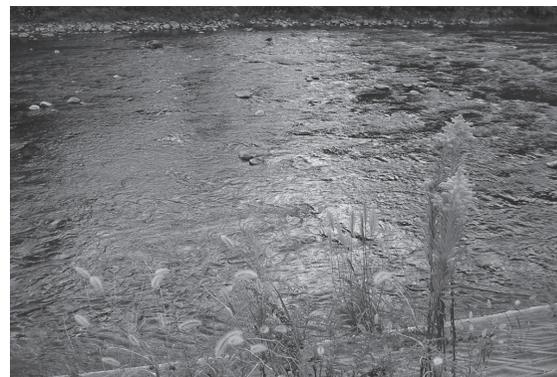
荒々しい自然は人間の脅威であると同時に高度な文明・産業・社会を創出するための貴重な宝庫と見做された。

宮沢賢治も怜悯な自然科学の観点から自然が畏怖する存在であることを熟知していた。しかしそれはまた人間を限りなく包み込む母なる大地でもあった。

彼は森羅万象とストレートに共振するなかで生じてくるさまざまな想念を作品として結晶させていった。こうした独自の創作スタイルをみずから「心象スケッチ」と呼んでいる。

種山ヶ原の心象スケッチ

表題の「水や光や風ぜんたいがわたくしなのだ」



という言葉は大正14年（1925）の詩「種山ヶ原」の下書き第一稿に記されている。

その前段となる部分を紹介しておこう。

あゝ何もかももうみんな透明だ

雲が風と水と虚空と光と核の塵とでなりたつときに

風も水も地殻もまたわたくしもそれとひとしく組成され

じつにわたくしは水や風やそれらの核の一部で

それをわたくしが感ずることは水や光や風ぜんたいがわたくしなのだ

種山ヶ原は北上山地の南西に広がる標高600mから870mの高原状の丘陵地帯で藩政時代からの放牧地として知られていた。賢治は大正6年（1917）から種山ヶ原のある江刺郡の地質調査を開始し、そのときの心象スケッチが「種山ヶ原」という詩に結実した。未完成の下書き第一項は彼の心象がより率直に表出しているといっていだらう。

土着のユートピアを展望

164行に及ぶ下書き第一稿には次のようなフレ



ーズも含まれている。

今日こそはこのよく拭はれた朝ぞらの下

その玢岩の大きな突起の上に立ち

なだらかな準平原や河谷に澱む暗い霧

北はけはしいあの死火山の浅葱まで

天に接する陸の波

イーハトヴ県を展望する

イーハトヴあるいはイーハトーヴは岩手=イハテから発想した造語で賢治がめざしたユートピアとしての岩手を象徴している。

彼は東京の約7倍もの面積をもつ辺境の地・岩手に土着しながら貧しい農民たちの生活=文化の改善に奔走した。大正15年=昭和元年（1926）に羅須地人協会を設立し、2000枚以上の肥料設計書を配布するなど農民の稲作指導に心血を注いだ。

そんな賢治にとって種山ヶ原はリアルに理想郷を展望することのできる原点ともいふべき場所だった。若き日の賢治は水や光や風などの森羅万象と共振しながらユートピアとしての未来を夢見ていたのだらう。

（高倉克也）